

てんかん治療に朗報

副作用少ない新薬相次ぐ

脳の神経の異常で、突然気を失うことのあるてんかん。国内では最近、副作用の少ない新治療薬が相次いで発売されている。てんかん治療に詳しい徳島大学病院神経内科の梶龍児科長は「てんかんの発作を抑えるのは抑えられる。病気に対する偏見をなくすためにも、根気強く治してほしい」と話す。梶科長に新薬について聞いた。

徳島大学病院神経内科 梶科長に聞く

てんかんは、脳の神経細胞が、原因の特定できない「特異性」が65・5%を占める過剰に興奮することで「特異性」が65・5%を占める過剰な病気が、手足のけいれんや顔面蒼白、意識不明、呼吸困難などの症状がある。全国で100万人の患者がいるといわれている。治療は、難治性てんかんは手術が行われるが、主流は薬物治療で、抗てんかん薬を服用すれば約8割の人は発作が消失する。専門医の指導で、徐々に服薬量を減らせば完治することもある。

原因は、脳血管障害(全患者の約11%)や先天性(8%)、外傷(5・5%)など、脳に明らかな原因のある「症候性」もある。日本では従来、4種類の抗てんかん薬があったが、



「てんかんは専門医のもとで根気強く治してほしい」と話す 徳島大学病院神経内科の梶龍児科長＝同病院

これら新薬の特長は副作用が少ないこと。従来の薬は、筋肉増加、多毛化、眠気、食欲低下、無力感などの副作用があったが、それらが緩和され、服用の継続が容易になった。毎半数人の新たな患者を救う梶科長は「副作用が少なくなったことで、患者のQOL(生活の質)は格段に向上した。正しく服薬すれば、患者の多くは普通の人と変わらないくらいに

患者の生活の質向上

服用継続も容易

日常生活を送ることができると言う。てんかんは3歳以下で最も多く発症するが、脳血管障害の原因とする高齢者の発症率も高い。2010年長は、男性が事故前日に薬の服用を怠り、発作が起き口に占める65歳以上の割合が27%と、全国でも番目に高い徳島県で、新薬の登場は朗報だ。梶科長は発作の誘因として、この男性のように服薬時間を守らないことのほか▽疲労▽深酒▽睡眠不足などを挙げ、「新薬の登場が起き、病気の関心が高まった。しかし、てんかんに対する偏見は少なくなった。発作を起こさないために、定期的な服薬と規則正しい生活習慣を心掛けてほしい」と話している。

(棚上素雅)

